

2010年春休み友情のレポーター カンボジア取材レポート

岩沢 壮太（島根県／当時 14 歳）

それでも笑う子ども

バタンバンの外れの村でみかけた一人の少女。自転車に乗ってなにやら重そうな荷物を担いでいる。その少女の顔には大人がめいっぱい広げた手のひらサイズの大きなアザがあった。真っ赤に腫れていて、首にはなにかでひっかいたような傷があった。服やズボンもボロボロで所々穴があいていた。その少女がぼくを見た瞬間、満面の笑みで手を振ってくれた。ぼくは今でも少女に聞きたい。

「なんで、なんで、そこまでされて笑えるの？」

始めに

みなさんはカンボジアという国をしていますか？今からおよそ 35 年前、カンボジアは恐怖の真っ只中にいました。ポルポト政権による大量虐殺で、全体の 3 分の 1 の国民が殺されました。その多くは医者か教師などの知識人や技術者でした。その後も政党同士の対立などもあり、内戦が続き多くの死者を出しました。カンボジアが平和を取り戻してきたのは、ここ最近だと言われています。僕たちはカンボジアの今を伝えるため、十日間の取材に行ってきました。

プノンペンの夜景「一日目」

飛行機から見たプノンペンの夜景はとても印象的でした。飛行機が着陸態勢に入りどんどん降りていきました。プノンペンに近づけば近づくほど「ついにカンボジアに来たのか」という意識が強くなっていきました。初めてプノンペンの町をトゥクトゥクで走った時、とても不思議な気持ちになりました。カンボジア独特の湿気と気温で日本とは全然ちがうのですが、カンボジアに来ている気がしませんでした。きっと町がきれいで静かでなにより雰囲気は日本に似ていたからでしょう。

物売りや物乞い「二日目」

一晩ぐっすり眠れたせいか疲れはなく、目覚めのよい朝を迎えられました。僕たちがレストランで朝ご飯を食べていると、足と手がない大人が本を抱えてクルマイスでやってきました。インターネットや本などで知ることと実際に体験するのでは全然ちがいました。30 分ぐらいの間に 10 人ぐらいの物売りか物乞いをする人がやってきました。来る前は子どもばかりやっているのだと思っていたら、そうではなく大人もたくさんやっていました。実際 10 人の内 1 人が子どもで 9 人が大人でした。僕は誰一人として目を合わせませんでした。

なにも買わないのに目を合わせるのが怖かった。なにもしないのに目を合わせるのが怖かった。その時はただ必死に目をそらしていたような気がします。隣のレストランで物売りをしている子どもを店員が追い払っていました。僕はその子どもをかわいそうだとも思わず、その店員に怒るわけでもなく、ただ自分のやっていることは店員と同じだなと思いました。自分の無力さにあきれただけでした。僕は人に取材する前に自分自身に質問しました。「今の自分になにができる？」と。

バタンバン

プノンペンから車で約 5 時間。KnK が運営する自立支援施設「若者の家」があるバタンバンに着きました。バタンバンはプノンペンとちがい、かなりなごやかな雰囲気がありました。バタンバンの道路を走っていると、真ん中にすごく大きな大仏？みたいなものがあります。多くの人がその大仏の前に座り頭を下げています。バタンバンと聞いて思い浮かぶのはあの仏像です。あれが何を意味しているかわかりませんが、きっとバタンバン市民にとってはすごく大きな存在なんだろうなと思いました。トゥクトゥクで走っていると小屋で水やおかしなどいろいろなものを売っている店がすごくいっぱいあり、すごく目にとまりました。まったく一緒のように見える店が何軒も何軒もありました。きれいな道路もバタンバン市内にはありますが、市内をちょっとはずれるとすぐにデコボコ道になり、数え切れないほど頭をぶつけたことを今でも痛い記憶として覚えています。

若者の家

「あれが若者の家だよ。」と言われてすぐ先に建物を見た時は本当に緊張で心が破裂しそうでした。カンボジアのみんなに打ち解けられるだろうか、言葉が通じないのにコミュニケーションが取れるだろうか、とすべての不安がこみ上げてきました。でもそんな不安は 10 秒後にあっさり消えてしまいました。若者の家のみんなが笑顔で迎えてくれたからでした。その後二人の男の子に屋上を案内してもらいました。今まで見たカンボジアの景色で一番きれいでした。二人の男の子はぼんやりと景色を見ていました。僕が名前を聞いてみると、身長が低い子がタイで僕と同じくらいの子がスローイと言いました。この二人が僕の初めての友だちであり、一番仲良くなった友だちでもありました。夜には、りこさんがやりたいと言っていたダンスで大盛り上がり。りこさんのダンスを紹介した後は、カンボジアのダンスを若者の家のみんなが紹介してくれました。カンボジアの踊りはシンプルだけど、足さばきや手の動きがすごく細かくて全然おどれませんでした。若者の家の子どもはほんとうに明るく目がきらきらしていました。

写真ワークショップ「三日目」

僕は今回の取材旅行でやりたいことがありました。それは写真ワークショップ。僕が

元から写真が好きだったこともあったけど、一番の狙いは写真を通してみんなに自己表現してほしいという願いがあったから企画しました。一言で自己表現といってもなにを撮っていいのかわからないけど、好きな物を撮ったり好きな角度から撮ったりするだけでも十分自己表現だと僕は思っています。写真で自分を出し合えば言葉の壁なんてなくなるし、もっともっと仲良くなると思い実行にいたりしました。この写真ワークショップをするにあたって僕の身近な人などにデジカメの寄付を呼びかけました。わずかな期間だったのにも関わらずたくさんの寄付がありほんとうにうれしく思い、寄付をしてくださった方の温かい気持ちに感激しました。ありがとうございました。この一大プロジェクト写真ワークショップは三日目に行いました。昨日紹介された若者の家の子どもたちの中から選ばれた四人と僕たち二人合計六人でしました。一人一人にカメラを渡すと、ほんとうに興味津々で撮り方などを一生懸命聞いてくれました。最初は何を撮っていいかわからないだろうということで、二つのチームに分かれてドミニクさんが出すテーマに沿って写真を撮りました。

一つのチームは「バタンバンの家」、もう一つは「バタンバンのお寺」でした。僕のチームは男の子のスローイ 17 歳と女の子のソックリー 17 歳でした。ドミニクさんが「学校とお寺どっちがいい？」と聞くとものすごい勢いで「お寺！！」とソックリーが言いました。かなりおとなしいスローイもそれにつられて僕たちのチームはお寺を撮ることになりました。

カンボジアのお寺はかなり豪華に思えました。金色が多くかなり洋風に見えました。この写真ワークショップでは通訳は一切入らないという決まりがあったので、言葉がまったく通じませんでした。伝えたいことが伝えられず、写真を見せてくれても笑顔でオッケーオッケーと言うことしかできませんでした。この時強く言葉の壁を感じました。二人とも初めてとは思えないほどうまくいったです。なにより楽しそうに撮ってくれたことがほんとうにうれしかったです。暑くなってきた昼頃いったんレストランに戻り、新たなお題が出されました。次は「子ども」と「お年寄り」でした。お年寄りを撮りに市場に行ったのですが、これがすごいにぎやかでみんな忙しそうでした。人を撮る時はちゃんとその人に写真を撮ってもいいですか？ときかなくてははいけません。ソックリーが僕たちを引っ張って歩いていたのですが、お年寄り一人一人に「日本から私たちの友だちが来ました。友だちが今写真を撮って歩いています。あなたの写真も撮らせてください。」としっかり説明していました。その姿はほんとうにまぶしいものがありました。身長は低いけど心はもう大人なんだなと思いました。市場にはたくさんの方が働いていましたが、かなり女性が多かったです。ホテル近くのレストランで昼ごはんを食べた後少し休憩して、バタンバンのはずれにあるアンコールの遺跡に行きました。遺跡はホテルから 30 分くらいの所にあるのですが、みんな行ったことがなかったそうです。カンボジアの歴史にはみんな興味津々で、特に身長が低い男の子タイプはほんとうに真剣に遺跡を見ていました。写真ワークショップを始めて一日しかたっていないのに、とても仲良くなれました。写真を見てこれは何？とか

これが好きとかたくさん話題がうまれました。なによりみんな写真を大好きになってくれたことが僕にとっては一番うれしかったです。

取材

朝、若者の家に行くとタイとスローイが僕の腕を無理やりひっぱって家具の職業訓練所に連れてこられました。そこに座ってと言われ木で作られたイスに座ると、スローイがそれ僕が作ったイスなんだと自慢げに話してくれました。家具を作っている時の二人はとても真剣でほんとうに静かな空気が流れていました。二人のすすめで僕も挑戦してみることに。思った以上に力を使う仕事で、力のない僕は苦戦。一回一回僕がやったというよりはやらせてもらったような気が……。そんなこともあり楽しく職業訓練の訓練をやっていると清水さんが「そろそろ取材してみるか」と一言。今まで名前や年などは聞いたりしていたけど、ビデオをまわして正式に取材というのは初めてだったので、その一言で一気に緊張しました。最初は、りこさんがスローイに取材、次に僕がタイに取材しました。ビデオをまわす前に色々質問の内容は紙にかいておくけど、実際は相手の答えで質問をかえてたので、あんまり意味はありませんでした。スローイの時は初めてということもあり、ビデオ係の僕も失敗を連発してしまいました。その中で職業訓練のことを主に聞きました。台本通りにすすめてしまったため、質問者と回答者とのキャッチボールになりませんでした。二回目の僕はもっと相手の回答に応じて質問しようと言われそれをやろうとしたのですが、予想以上に難しく何度も失敗してしまいました。それでもなんとか取材という形にはもっていかれたかなと思います。これは取材の最後の部分です。

壮太：両親はいますか？

タイ：いません（亡くなった）。

壮太：何人兄弟ですか？

タイ：六人兄弟で、男4人と女2人です。

壮太：兄弟は今何をしていますか？

タイ：女2人は他の施設にいて、男1人は若者の家にいて、もう2人はお坊さんをしています。

壮太：兄弟に会ったりはしますか？

タイ：女の子の方は行きますが、お坊さんをしている方はなかなか会えません。

壮太：若者の家に来る前はどこで何をしていましたか？

タイ：タイに出稼ぎに行って家族を養っていました。

ここでもうすでに全身鳥肌が立って気がくるいそうだったのですが、震える口を無理やり動かして最後の質問をしました。

「なにをして稼いでいたのですか？」

タイの顔がどんどん陰しくなって、10秒くらい暗い表情を見せた後のたった一言。

「物乞い。」

ほんとうに苦しかった。ほんとうに悲しかった。ほんとうに悔しかった。ほんとうに泣きたいのはタイの方なのに、ボロボロ涙がこぼれ落ちてしまう。止めたいのに止まらない。これは、何の涙だかはわからない。でもこれだけはわかっていた。うれしさや怒りではなく悲しみの涙だということは。最後の質問の時のタイの表情は絶対忘れない。僕はタイの心の傷の深さはわからない。見当もつかない。きっと経験しないと絶対にわからないことだと思う。でも物乞いをして楽しい人はいないだろう。物乞い以外の家族を助けるすべさえあれば物乞いなんてしないだろう。僕は今この時をタイとおなじように物乞いや物売りをしている子にそれ以外の生きる選択肢を作りたいと心から思いました。

写真ワークショップ2「五日目」

バンブートレイン、それは鉄道の上を板一枚でエンジンを積み走る乗り物です。みなさんもぜひお近くの鉄道でチャレンジしてみてください。ということで第二回写真ワークショップ午前の部の会場は、このバンブートレインに乗って見える景色でした。ほんとうに大自然という一言しかないぐらい自然がきれいで風がすごく気持ちよかったです。車が来たらどうしようかとつねに身構えていた僕にとっては全然リラックスできるような環境にはいたりませんでした。みんな自分が動きながら撮るのは初めてで、つい手振れしてしまったり、シャッターを押すのが遅く全然写ってなかったりと色々苦戦していました。バンブートレインが止まって着いた所は大きなレンガ工場。このレンガ工場で児童労働の現場を見ました。必死に働いている男の子に笑顔はなく、ただ黙々と仕事をこなしていました。男の子はレンガを運ぶ仕事をしていました。1000個運んだら5ドルで、100個運ぶのに五日かかるそうです。100円に満たないお金をかせぐために一日中汗水たらしてレンガを運ぶのです。その光景を見ていたら涙が流れてきてしまいました。これは悲しみも混じる怒りの涙だと思います。一生懸命働いている子どもの後ろで笑っている大人を見つけたからです。もし僕が子どもたちの手を引いて走って逃げたら逃げられるかもしれない、でも僕は子どもを養えないし自分も一人では生きて行けない。子どもたちにとってはこのわずかな稼ぎが命綱なんだと改めて実感しました。僕はせめてこの子の今を写真に写し伝えることが、この子へなにもしてやれないせめてもの罪滅ぼしだと思っています。午後はドミニクさんの提案で、けっこうあることだそうです。みんなでカンボジアの伝統衣装を着て写真撮影をしました。カンボジアではきれいな服を着たりお化粧をしたりしてもらって変身した自分の姿を撮ってもらうことはけっこうあることだそうです。日本にはない習慣だと思うのでとてもびっくりしました。女の子の方が化粧などで一時間ぐらいかかってもまだできていなかったの、僕もこんなに手入れされるのかと楽しみにしていたら「そこの君」と呼ばれてわずか3分で終了。少しがっかりしていましたが鏡を見て見ると着ている服にびっくり！！こんなに豪華な服は着たことがなかったの、大はしゃぎしていました。六人の中で一番変わっていたのがりこさんで、

すっかりカンボジア人になっていました。後から集合写真を見てもカンボジア人、カンボジア人、カンボジア人、カンボジア人、ヨーロッパ人、カンボジア人と一人も日本人がいない有様に誰がヨーロッパ人かは写真を見て判断してくださいね。不思議なもので楽しい時の時間はとても早く過ぎてしまいます。ほんとうにあっという間の1日でした。

ソックリーとシアへの取材「六日目」

六日目の午前中は僕は体調を崩してしまい同行できませんでしたが、公立学校に行ったり、ストリートファミリーも取材しました。午後は体調も回復したので、最初に取りこさんがシアに、次に僕がソックリーにインタビューしました。シアは2009年の11月に若者の家に入りビューティーサロンの職業訓練を受けています。家族はバタンバンから車で約5時間くらいのところにあるプノンペンの路上でくらしているそうです。バタンバンからプノンペンまで遠いため、若者の家に来てから一度も家族にあっていないと言っていました。今年の四月にカンボジア旧正月の時に初めて家族に会うそうです。ソックリーは若者の家に来る前はジャガイモ畑で働いて家族を助けていたと言います。1ヘクタール全部植え終わると100ドルもらえるという出来高せいだったそうです。1ヘクタールというのはたて100m横100mの正四角形です。これを全て手作業でやると聞いた時は信じられなくてポカンと口を開けて呆然としていました。ほんとうに信じられない過去を持った二人だけど、前を向いてしっかり歩いていることを知っているのだから大丈夫だと信じています。決して楽とは思えないけど自分の夢に向かって一歩一歩あゆんでいってほしいです。そして、僕も若者の家のみんなも一緒に歩いていきます。

刑務所見学「七日目」

僕は刑務所に行ったことがありませんでした。それどころか見たことすらありませんでした。初めての刑務所見学がカンボジアということで、始めはすごく違和感がありました。刑務所はとても怖いイメージがあったので、どんな所だろうと不安でした。実際に行ってみると全然怖くないというわけではありませんが、とても活気を感じました。刑務所の中に入った時はとても怖かったです。もし閉じ込められたらどうしようと思ってしまう自分がいました。そんな中で裁縫のクラスと絵画のクラスの人たちに会いました。裁縫クラスには子どもからお年寄りまでいて楽しそうでした。絵画クラスが一番絵が上手な大人がいました。彼は色々な所から注文がくるぐらいで、もう仕事を持っていることと同じことだよと言っていました。彼は八年前からこの刑務所にいるそうです。八年間刑務所から出ていないということです。もし自分が八年間ここから出るなと言われたらと考えるとぞっとします。きつとうつ病になるんじゃないかなと思います。KnKがこのクラスを立ち上げる前はみんなやることもなく呆然と生きていたと言います。人間は何かすることがないと生きている実感がわ

かないんだと思いました。実際なにもやることがなくイライラすることはありませんか？僕は少しだけ経験したことがあります。これが八年間も続いたらと思うとまたゾッとしました。刑務所にいるときは外の様子がわからないため、ドミニクさんなどが撮ってきた写真を渡してそれを見て絵を描いています。僕も奥出雲町の写真を撮って絵を描いてもらおうと思います。

写真展示会

ついにこれまでためてきた写真をみんなに見てもらおうときが来ました。数多くの写真から清水さんの目によって選ばれた50枚程の写真は、みんな個性が現れていてほんとうに楽しい写真展示会になりました。自分の写真を見てもらおうということはこんなにも気持ちがいいものかとびっくりしました。一緒に行動していたのに僕が全然見たことのない景色が写真に写っていてさらにびっくりしました。これは何？あれは何？と聞かれて大忙しの六人。この流れに合わせて日本の紹介や僕の住んでいる町奥出雲の紹介などいろいろなことを発表しました。いつ帰るのと男の子二人に聞かれました。僕が明日の朝というと、いつ来るの？と聞かれました。僕は一年後と答えていました。約束をしてしまったので、一年以内に帰って行きます。

別れの日「八日目」

今日は別れの日。すごく暑いバタンバンから別れる日。若者の家のみんなと別れる日。一番仲良くなった四人の友だちと別れる日。目が覚めて起きた時は悲しみしかありませんでした。朝、別れの言葉を言いに行き若者の家を訪れたら、すごい笑顔でスローイが迎えてくれました。悲しみしかなかった気持ちがこの笑顔ですごく明るくなった気がします。その後僕とりこさんで作成した写真付きメッセージカードを四人、一人一人に渡しました。それをスタッフがクメール語で読んでくれました。みんな笑ったり照れたりしていました。ソックリーの目には涙まで浮かんでいました。

「ほんとうにほんとうにカンボジアに来てよかった」とソックリーの涙やみんなの笑顔を見た時に思いました。そして絶対またカンボジアに帰ってくるよと約束しました。四人からのメッセージは本当に心にジーンとくるものがありました。みんなすごく他人思いで優しいのです。あの四人そして若者の家の子どもたちとすごした六日間はすごく僕にとって大きな経験だったと思います。この四人にきづかされたこともいっぱいありました。ほんとうに、驚き、楽しみ、悲しみ、また驚きとこの繰り返しであったという間の六日間だったように思います。若者の家のみんなそして、タイ、スローイ、ソックリー、レアほんとうにほんとうにありがとう。そして、さようなら。

オフの日

プノンペンはやっぱり都会だなと感じたのはバタンバンから帰ってきて二日目の日でした。この日は今までのつかれをとるためにオフになりみんなでプノンペン観光

をしました。まさかプノンペン観光で象に乗るとは思ってもいませんでした。疲れをとるところか逆に疲れが倍増したように思いました。もう二度と乗らないと心にちかいました。その後市場でお買物。あまり買い物は好きではないのですが、この日は非常に楽しかったです。なぜかという、一つの商品を見ていたとします。するとすぐに店員が寄ってきていろいろ商品の説明をします。いくら？と聞くと4ドルと言ったとします。それを聞いて僕がすごく渋い顔をすると店員が3ドルと言ってきます。次にぼくが立ち上がると2ドルと言います。最後に立ち去ろうとすると1ドルと言ってきます。それがすごく楽しかったです。

ロイヤルパレスという昔の王様の王宮にもいきました。とても豪華でキラキラしていました。夜ご飯をレストランで食べていると少年が重そうな本が入ったカゴをぶらさげてやってきました。清水さんの話によると彼は、3年前にもいたらしく顔を覚えとけと言われました。物乞いの人や物売りの人にも名前や歳などを聞けるようになっていました。なのでその少年にも名前や歳を聞いていました。名前はホーン、歳は14歳と言いました。14歳と聞いて今までにない感情が急にやってきました。なんだか分からないけどほんとうに苦しかった。僕は3年前なにやってたんだろ？とか考えたりしているうちにどんどんホーンの人生と僕の人生を重ねりあわせていました。「僕も14歳」と答えた時のホーンがみせたあの苦しそうな苦笑いは今でもはっきりと心にしみついています。

カンボジア最終日

カンボジア最終日の今日はまず国立博物館に行きそのあと、ドミニクさんが僕とりこさんにインタビューしました。ドミニクさんの質問にこういう質問がありました。

「あなたと若者の家の子どもたちはちがいますか？それとも同じですか？」
若者の家にいた時こういうことがありました。スローイ、タイ、それと僕でトゥクトゥクに乗っている時、特にその日なにかあったわけでもないのに、みんな大笑いしながら大さわぎしていました。誰かがさわぐと笑い、誰かが笑うとみんな大笑いしていました。まったく言葉は通じません。相手が何を考えているかもわかりません。でも、単純にただ単純にみんなでいるのが楽しかった。

「同じだと思います。いっしょに遊んだし、いっしょに笑ったし、いっしょに泣いたからぼくたちは同じです。」

最後にドミニクさんに質問させてもらいました。

「世界を変えられると思いますか？」

ドミニクさんは笑顔で言いました。

「もちろん」

カンボジアの今を見て来て思うこと

僕が日本に帰ってきて一番カンボジアのことがパツとうかんだしゅんかんがありま

した。それは、学校給食の時、周りの人が平気でまずい、まずいと言って残飯ボックスに入れるしゅんかんを見た時でした。この時ふと思ったことがあります。ほんとうに当たり前のように毎日三食をたべれることがどんだけ幸せかということはこのカンボジア取材で一番教えられたような気がしたのです。「食べれる」ことの幸せ、「生きれる」ということの幸せ、そして、心の底から「笑顔」になれるという幸せ。これら全てを持つことが当たり前ではなく特別なことということを知りました。

でも僕は思います。

全ての人が毎日食べなければダメなんだと。

全ての人が安心して生きていかなければダメなんだと。

全ての人が心の底から笑顔もなれなくてはダメなんだと。

たまたま貧困家庭に生まれただけで物乞いを強制させられる世の中はダメなんだと。カンボジアのみんなの笑顔はほんとうにまぶしかった。ほんとうに気持ちが明るくなった。この笑顔をなくさせては絶対ダメだ。この子たちから生きる希望をとったら絶対ダメだと。

今、この時、明日生きれるか不安で悲しみの顔をしている子どもがいます。

今、この時、うえて死んで行く子どもがいます。

僕はこのことを伝え続けます。

僕は苦しんでいる子どもたちと共に生き続けます。

カンボジアが笑顔にそまるまで、世界が笑顔にそまるまで、ぼくは走り続けます。

全世界の苦しんでいる子どもたちへ

あなたは何も悪いことはありません。

あなたに罪はありません。

もし楽しいことがあれば、おどりながら大笑いしてください。

もし悲しいことがあれば、体中の水分をつかい切るほど泣いてください。

もし、怒りを覚える時があれば、気が狂うほど怒ってください。

もし、その場にいるのがいやになったら、つかれて気を失うまで逃げ続けてください。

それでも、なにがあっても、生きてください。なにをしてでも生きてください。

あなたが心の底から笑顔になるまで、僕はあなたのととなりで生き続けます。

2010年 春休み友情のレポーター 岩沢 壮太

2010年春休み友情のレポーター カンボジア取材レポート

藤岡 りこ（東京都／当時 17 歳）

1 日目

今日はいよいよカンボジアに行く日。

私にとって、この取材は初海外。飛行機に乗るのも初めてで少し緊張しながらも、期待の気持ちの方が大きく、成田空港を飛びたった。飛行機の中では、本をよんだり、クメール語で自己紹介できるように紙にかいて覚えていた。ソウルから、プノンペンまでの飛行機の中では、隣の座席に座っていたカンボジアの方と仲良くなった。英語で話しかけられ、おもしろくて親切な人だったので、カンボジアってどんな国なのかなともっとワクワクした。着陸まであと少し、真夜中にプノンペンの様子を飛行機の中から見た。街灯でキラキラしているが、東京と違って高い建物はあまりないなと思った。街灯で街がオレンジ色に染まっていた。飛行機を降りてすぐ「むし暑い。雨のおいがする。」と思った。トゥクトゥクという、バイクのうしろに 6 人程のれる座席のついたバイクタクシーにのって、ホテルまで移動。

2 日目

午前、車でプノンペンからバタンバンに移動。道路には信号がなく、道は一本道。道路ではバイク、トゥクトゥク、馬車、自転車、車、トラック、バスなどいろいろなものが走っている。特にバイクの交通量が多く乗る人数制限もないため、6 人が 1 つのバイクにのっている姿もみかける。日本では決して見られない光景で驚いた。プノンペンから少し行き、道の両サイドに目に向けると、見わたす限りに広がった農地や森林。ヤギや鹿、牛、馬などがたくさんいる。風通しのよい、伝統的な高床式の家が多い。カンボジアは、何か少し日本と似た空気をもっていて、ちょっと昔の日本にいるような気がした。

若者の家に到着。女の子、男の子が迎えてくれた。明日から 5 日間一緒に行動をする 4 人のうちの 2 人の男の子が自分の部屋や浴室を見せてくれた。部屋は 5 人部屋で勉強机が 1 つあった。簡素でさっぱりとした部屋だったが、机の前には家族の写真が何枚か貼られていた。夕食の時間になり、皆の前でクメール語で自己紹介した。

「クニョム チュモツ リコ」「クニョ ミエンアユッ ドップランピー」

「クニョ マオピー ジャボン」「ダーイ バーン チュ クニャ」

日本語にすると、「私の名前はりこです。」「17 歳です。」

「日本から来ました。」「よろしくお願ひします。」

これだけの短い言葉なのに、とぎれとぎれ片言になってしまった。それなのに皆、拍

手をしてくれて緊張がほぐれ、とてもうれしかった。女の子に混じって夕食を食べた。ご飯をよそってくれて、3種類あるスープをご飯にかけてくれた。いろいろな野菜、魚、肉が混じっていて家庭料理の味がした。日本語で「おいしい」と話せる子もいた。ご飯のあとは、ダンスの時間！日本からもってきた SMAP の「世界に1つだけの花」をかけて、みんなでダンス！カンボジアでは、私のふりつめたようなダンスはしないらしく、皆慣れないようだった。最初は男女共に気が進まないようだったけど、踊っていくうちに笑顔がみえてきて、一生懸命覚えようとしてくれた。とってもうれしくて、楽しくダンスができた。そして、クメールの伝統ダンスもおしえてもらった。日本の盆踊りみたいにみんなで円をつくってそのまわりで踊る。皆、指と手をなめらかに使っていて、教えてもらっても真似するのは難しかった。人なつっこくて、優しく、1日目にして皆のことが大好きになった。

3日目

今日は朝早くから男の子2人、女の子2人の計4人が来てくれた。

みんな気さくで、とっても優しい。まず初めに、一人一人にデジカメを渡し、日本語、英語、クメール語を交えながらジェスチャーでデジカメの使い方を簡単に説明し、少し練習をした。その後、寺チームと家チームの2チームに分かれて、それぞれ撮影をした。私は家チームだったが、古い建物や他の NGO 団体の施設の建物、美しく整備された市役所の建物を撮ったり、道のあちこちに咲いているかわいいお花を撮ったり、お互いに撮り合ったり、皆とても楽しそう。トゥクトゥクで移動のときは、自分のとった写真を何度も見返している。

次に、大人を撮るチーム、子どもを撮るチームの2チームに分かれて撮影。私は子どもを撮るチームだった。マーケットに行くと、3~5才くらいの子どもがたくさんいた。カメラを向けるとみんな不思議そうな顔をする。そして、撮った写真を見せるとくしゅっと笑い、うれしそうだった。帰りにごみ拾いをしている10才くらいの女の子と3才くらい、7才くらいの男の子2人に出会った。トゥクトゥクを止めて「写真をとってもいいですか？」と話しかけた。いいよと言ってくれ、撮るが、撮った写真を見せても誰の顔にも笑顔はなかった。ストリートチルドレンなのかな？学校には行ってないのかな？疑問が残ったまま、「オークン」（ありがとう）と言って、その場を去った。

一度皆で集まってから、トゥクトゥクに約40分くらいのって、村の民家を通りアンコール遺跡へ行った。石でつくられた遺跡は、日本では決して見ることのできないものだ。ドーム型のようなおもしろい形で、アンコール朝の時代の礼拝の場所だったみたいだ。どのように積み重ねてあるのかなと、危険だけど、中に入ってみたくなった。また、彫ってある彫刻も1つ1つ丁寧に、何の絵を彫っているのかはわからなかったが、すごいなと思った。あと、表面に半径3センチくらいの円がいくつも順序なくあけられていた。聞いてみると、銃弾のあとらしい。本当なのかな？もし本当だったら、

数十年前にはここは戦場だったのかな。私たちが訪れた時は、とっても静かで、のどかで、おだやかな場所だった。4人もここを訪れるのは初めてだったみたいで、現地スタッフの方の説明を熱心にきき、たくさんの写真をとっていた。

4日目

今日は午前中、若者の家で家具づくりの職業訓練をしている、スローイとタイのところへ行った。2人ともいすをつくっていた。いすが手作業でつくられるのを見るのは初めてで正直とても驚いた。なぜなら、本当に上手につくられていたから。角は補強のためにうすくスライスされた木片で上手に巻きつけられていた。1つのいすをつくるのに約5日かかり、できあがったいすは、1脚5ドルで売るのでそうだ。私から見たら、手製で、丁寧で補強もしっかりとなされていて、確実に5ドル以上の価値はあると思った。いすをつくっている時の2人は、どちらも今まで見たことないくらい真剣な目だった。

そして、マイクは壮太くん、ビデオ撮影は私でタイにインタビューした。

初めて彼に家族のことを聞いた。会ってまだ3日目の友だちに家族のことや過去のことを聞くのは、思っていた以上に勇気のいることだった。どこまで聞いていいのかな。傷ついてしまわないかな。そのことばかりが頭の中でぐるぐる回っていた。今でもはっきりと私の耳にのこっているのは「2年前まで家族を助けるために物乞いをしていた」と言った言葉。彼は私と同じ17歳。私は2年前、何をしていたらだろうか？今まで、家族を助けるために必死になったことがあったらだろうか？タイは普段やんちゃで明るくて、とても優しい。そうだったからなおさら彼から直接そのことを聞くとショックで胸がいっぱいになり、自然と涙があふれてでてきてしまった。そしてしばらくの間は、壮太くんも私も涙がとまらなかった。若者の家の子は、皆何かしら家庭に問題があったり、貧困だったりする。しかし、彼らと接してもそのことを感じることはない。他の子より明るいのではないかと思うくらい元気だ。彼の家族や過去のことを知る機会がなかったら、涙を流すことはなかったかもしれない。明るくて優しい子という印象でおわっていただろう。けれども、インタビューすることによって、彼の心の強さを知った。インタビューしても時々険しい表情はするが、涙は一滴もおとさなかった。物乞いをしてまでも守るべき家族がいたからだと思う。今は、両親が亡くなっており、兄弟6人バラバラに生活している。

インタビューを通して、物乞いをしていること、家族が離ればなれになっていることなどが“別の国でおこっている他人事”とは思えなくなった。日本人としてではなく、“友だち”として、少しでも彼らの力になりたいと思った。

5日目

今日は若者の家に行き、4人のうちソックリーという17歳の女の子の職業訓練の様子を見学した。ソックリーは裁縫の職業訓練をしている。始めてまだ5ヶ月らしいが、

ミシンで上手に洋服をぬっていた。今ぬっている服は、4月の中旬にあるカンボジアの旧正月のア祭りのときにお母さんにプレゼントするらしい。水色のかわいらしい柄で、お母さんはきっと喜ぶだろうなと思った。ぬっている様子を見ていたら、切れ布を用意してくれて私に“どうぞ”とミシンを貸してくれた。日本の電動ミシンとは違い、足を交互にパタパタと押して動くミシンである。初めはミシンの使い方を説明されてもクメール語が理解できなかったが、一度手本を見せてもらうとすぐに使えるようになった。自分の押す足のスピードによってぬう速さが変わるので、私は日本のミシンよりも使いやすく感じた。それでも慣れるまでは糸が何度もはずれてしまったり、少し難しかった。裁縫の職業訓練をしている人は約10人くらい。若者の家に住んでいる子だけでなく、地域からも裁縫の職業訓練をするために来る子が5人くらいいた。皆フレンドリーで、教室をのぞく度においでおいでと言ってくれたり、作ったドレスを着せてくれたりした。本当に楽しくうれしかった。

その後、バンブートレインという板1枚の列車に乗って、レンガ工場に行った。レンガ工場ではものすごい爆音の中、レンガが手際よく作られていた。また、子どもの労働者が多かった。レンガを1000個運んだら5ドルもらえるそうだ。ところがレンガを1000個運ぶのに5日はかかる。結局、学校も行かずに働いて1日1ドルしかもらえない。私はなんだかやるせない気持ちになった。

午後はクメールの伝統衣装を写真館で着た。今までの人生で一番濃いメイクをしてもらい、青の衣装に着替えた。色が鮮やかで混じり気がなくきれいだった。他の4人もとてもうれしそうで女の子の化粧後の変わり様、男の子の着替え後の変わり様に驚きながらもワクワクした。皆カンボジアのKing、Queenになったようだった。

6日目

今日は午前中、公立学校の見学に行った。

学校に行くと4月の中旬にあるカンボジアの旧正月モードで、先生が休暇をとおていて授業がないクラスがいくつもあった。1クラス20人くらいで、皆仲良く楽しそうな雰囲気だった。好きな教科を聞くと、English!と返ってきて、言語が好きな子が多いように感じた。また駐輪場に行くと、驚く程たくさんのバイクがずらーっと並んでいた。

その後、政府の管理する図書館へ行き、そこでストリートファミリーに出会った。その図書館の周りに住んでいるらしく、インタビューさせてもらった。ストリートファミリーを見るのは初めてで、少し戸惑った。インタビューさせてもらったのは24歳の女性で、1歳2ヶ月と4歳の男の子の子どもがいた。ハエが何十匹も飛びかっているのに1歳2ヶ月の子は裸で衛生状態がとても悪く病気になったりしないか心配になった。昼間は町に物乞いにしに行ったり、プラスチックのゴミを集めてお金をしているそうだ。1日1日どう過ごすかを考えて生きているように感じた。そこで、お母さんである彼女に「2人の子どもはどうなってほしいですか」と質問したら、「お金の

ことはどうすればいいのか全然わからないけれど、学校に行かせたい」と答えた。彼女は今まで一度も学校に行ったことがなく、クメール語を読むことも書くこともできない。子どもには安定した生活を送ってほしいと願う親はたくさんいる。けれどもストリートファミリーの元に生まれた子どもは小さい頃から働いて学校に行くのは難しいと思った。どんな子どもにも平等に学校で学ぶ権利はあるのだから、いつか皆が学校に行けるような社会をつかっていきたいと思った。そして、ストリートファミリーがストリートファミリーを生まないようにしたいと思った。

そして午後は4人のうちの女の子2人、ソックリーとレアにインタビューした。私がマイクを向けてインタビューしたのはレア。仲良くなったからなおさら家族や過去のことについてインタビューするのは辛く、インタビューしたくないとも思った。だが、知らなければ何も始まらないと思い直し、勇気をふりしぼってインタビューした。家族は病気を患っていてプノンペンで路上生活をしているお母さんと学校に行っている弟の3人家族だ。レアは若者の家に来る前、家族を助けるために市場で仕事をしていたという。学校には行けるときは行き、行けないときは行かなかったそうだ。そして現在は市場にある美容室で5ヶ月前から職業訓練をしている。若者の家のあるバタンバンから家族のいるプノンペンまで約400キロ、車で4時間以上かかる。プノンペンまで行くお金がない為、若者の家に入った5ヶ月前からまだ一度も家族に会っていない。数週間のカンボジアの旧正月のときにやっと家族に会えると話していた。「もしお金があったら、家族に会いたいですか？」と聞いてすぐ、会いたいに決まっているよね。当たり前のことを聞いてごめんね。と思い、涙がでてきてしまった。いつでも笑いかけると笑ってくれるレア。彼女は誰よりも他人思いで弱さを見せない、本当に強い子だと思う。前向きに一生懸命頑張る姿を見て、エネルギーをもらったし、“自分のサロンをもつ”という素敵な夢を叶えてほしいと心から思った。

7日目

今日は午前中、バタンバンの刑務所に言った。友情のレポーターが刑務所を訪れるのは初めてということで、少し緊張した。

刑務所では、裁縫と絵画の職業訓練の様子を見せてもらった。裁縫は、割と幅広い年齢の方がいた。全て手作業でコースターやバッグ、ドレスなどをつくっていてとても驚いた。コースターは製品を見ただけでは絶対にどうやってつくったのかわからないくらい凝ったかわいらしい柄だった。慣れている人は手元を見なくても手早く上手につくっていて感動した。

また絵画の職業訓練では、油絵、鉛筆で描いた絵、絵の具で描いた絵があり、どれも色使いが工夫されていて、本物の画家と思うくらい上手だった。刑務所の外には出られないため、刑務所の外で撮られた写真をもとにして描いた絵が多くみられた。

絵画の職業訓練をしている人は14歳～17歳までの子どもたちだった。彼らが過去に何をしたのかはわからないけれど、他の子と変わらない笑顔を向けてくれてとても

れしかった。描いた絵は1枚1ドルで売って、利益を刑務所の中で日用品を買うお金にしたり、刑務所をでるときの資金にするそうだ。今習っている職業訓練を活かして、刑務所を出た後うまく社会に復帰してほしいと思った。

午後は若者の家に行き、3日目～6日目までに若者の家の子どもたち4人と私たち2人が撮った写真の中から60枚程選んで写真展をした。電気が使えなかったため、4人以外の若者の家の子どもたちと撮った写真がアップできず、少し残念だった。でも皆、興味深そうに写真をみたり、私たちの日本紹介を聞いてくれて本当にうれしかった。

8日目

今日は若者の家の皆とお別れをして、プノンペンに向かう日。

若者の家につくといつものように皆が話しかけてくれたが、今日はなんだか笑顔になれなかった。絵手紙をくれたり、絵はがきをくれたりして本当に嬉しかったが、同時に別れの実感が湧き悲しくなったからだ。

そして6日間行動を共にした4人の子どもたちに感謝の意をこめて、壮太くんと私で作ったメッセージカードを贈った。4人の中に英語を少しでも話せる子はいなかった。それでも、ジェスチャーや笑顔だけで相手の言いたい事がわかるようになり、泣いたり笑ったり気持ちを理解することができた。初めはクメール語がわからないために話す機会も少なかったが、写真ワークショップなどを通して、たくさん話すようになった。話しの内容は簡単で、写真を見合せて「きれい」とか「上手」とか「楽しい」、「この花すき」とか。本当にちょっとした事しか話せなかったけど、お互い感情を共有することができたと思う。

メッセージカードは日本語で書き、KnKのスタッフの方に英語、クメール語の順に直してもらった。6日間通して感じたことや、伝えたいことをつづった。4人からもそれぞれ口答でメッセージをもらった。一番心に残ったのは「今までの人生の中で一番楽しかった」と言われた時のこと。遺跡に行ったり、バンブートレインに乗ったり、皆でごはんを食べたり、写真をとったり、私たちは初めて体験することばかりだったが、彼らにとっても初めて体験することばかりだったのだと思う。子どもたちにとっても心に残る6日間だったようで、私は本当に、本当に嬉しかった。仲良くしてくれた裁縫の子どもたちのところへも行き、最後のあいさつをした。子どもたちは優しく、強くて、笑顔が絶えない子ばかり。彼らといると自然と笑顔になれる。若者の家で感じたこと、子どもたちの心の強さ、そして優しさを1人でも多くの日本人に伝えたいと思った。

KnKスタッフの方、KnK現地スタッフの方、若者の家の子どもたち、皆に支えられて楽しく実りのある取材となった。この取材で数々のことを学んだ。本を読んだり、映画を見たりするだけではわからない、カンボジアの良い所をたくさん。

そして何より、共に成長できたと思う。お互いに進む道は違うけれど、それぞれの将

来の夢に向けて、頑張っていきたい。
必ずまた戻ってくると約束し、ボタンバンを去った。

9日目

今日は終日プノンペン市の見学をした。そして夜は若者の家の卒業生3人と一緒に夕食を食べた。2人はグラフィックデザイナーで、1人は昼間仕事をして、夜に大学院へ行っている方だった。英語で会話をしたが、私が上手く話せないせいで通じないこともしばしばあった。それでも何とか高校時代に好きだった科目、好きなスポーツなどを話した。そして話しているうちに3つの質問を出された。

- ① プノンペンから東京までの距離は何 km?
- ② 日本の人口は何人?
- ③ 日本の1人あたりの国民総生産はいくら?

簡単な質問のようだけれど、どれも満足な答えを述べられなかった。日本のことなのに、答えられなくて少し恥ずかしかった。

10日目 プノンペンで出会った物乞いの子どもたち

午前、国立博物館をでるとすぐ1人の女の子に物乞いされた。人生で初めて物乞いをされた。彼女は昨日、私たちの泊まっているホテルの横にいた子で、清水さんがいづらか渡した子だった。彼女はたぶん私の顔を覚えていたのだろう。すぐに私のところへかけよってきて、お金がほしい、I'm hungry.と悲しい目を向けて手をのばしてくる。私はポケットから2000リエルをとりだし、その子に渡した。すると何も言わずにさっとどこかへ行ってしまった。その様子を見ていた他の子が私のところへよってきた。3人の子に囲まれた。僕にもくれ！私にもちょうだい！と言わんばかりの顔で。私は少し動揺した。どうしようか。困ったけれどとりあえず歩いた。歩いて歩いても彼らはずついてくる。彼らは腕をぎゅっとつかみ、目を合わせようとする。途中で1人、2人抜け、最後に1人の女の子だけになり、他の子は見えなくなってしまった。私は「他の子とはぐれちゃうよ。ちゃんと戻りなね。」と言って、1ドルを渡した。そうしたら、その子も1ドル札を受けとった瞬間、さっと戻ってしまった。そして意外にも近くにいた他の子がまたやってきてしまった。手をたくさん伸ばしてくる。その中の1人はついにホテルの前まで来たのだが、帰されてしまった。ふりむくと泣いていた。あの後ろ姿を今でも忘れられない。

そして昼食を食べにレストランへ行ったとき、帰り道にまた彼らに会ってしまった。そのときはなぜか本当に会いたくなかった。少しまわり道をして見つからないようにしたけれどだめだった。彼らはすぐに、誰がお金をくれそうな顔をしているかわかってしまうのだそうだ。そして結局またホテル前まで来てしまった。2人の子がいて、清水さんが2000リエルずつ渡した。すると、1人の子が「さっきの子には1ドルだったのにね」と言ってきた。なんだかとても悲しくなった。そうしているうちに、さ

つき博物館前で 2000 リエル渡した子と、赤ん坊を抱いたお母さんの 2 人がホテルの扉の前に立ちふさがってしまった。どうしたらいいのかわからず、お母さんの方に 1 ドル渡した。その時、手が震えていたせいでにぎっていたお札を落としてしまった。すると、横にいた女の子がさっと拾ってどこかへもって行ってしまった。私は本当に悲しくなり、泣きそうになった。

そんな彼女たちも、名前をきいたり年齢をきいたりすると、ニコッと笑顔で答えてくれる。笑った顔は子どもらしい表情が見えてなんだかホッとした。彼女たちと同じ歳の日本の子どもたちなら、外で元気よく遊んでいて、お金を持ったことのない子、お金を知らない子さえいるかもしれない。けれども、彼女たちは貧しいせいでお金に縛られた生活をしていると思った。たとえそのお金が彼女たちが生きるために必要なお金だったとしても、なんだかやるせなかった。そして、子どもが子どもらしくいられなくなっているのを感じた。彼女たちが大きくなった時、人からお金をもらうことを当たり前だと思ってしまわないか、ということも心配だった。豊かさの違いによって、子どもの権利が奪われてしまう。そう感じた。

まとめ

カンボジアで過ごした 10 日間は、本当にあっという間だった。

しかしその間、1 日 1 日新しい事を学び、考えた。若者の家の子どもたちと出会い、彼らの心の強さ、優しさを感じた。一緒に行動していると、常に笑い合い、笑顔が絶えなかった。若者の家は皆が家族のようで、いるだけで心が温まる場であった。本当に心から仲良くなれたと思う。この出会いを大切に、自分にもっと力をつけて、少しでも彼らの力になりたいと思う。また、今まで本でしか見たことのなかったストリートファミリーや物売りの子、物乞いの子に実際に出会った。その中には、話せない人や地雷で両足のない人、私より小さい子が大勢いた。何かしたいと思いながら、実際に出会うと衝撃的で何一つできない自分が悔しかった。今よりも、世界中の 1 人でも多くの人が幸せと笑って過ごせる日が来るように、この取材を活かしていきたいと思う。

2010 年 春休み友情のレポーター 藤岡 りこ